



リサイクル広場の名物おじさんがNHKに生出演

「牛乳パックのリサイクル工法」特許でいよいよ夢ハウスの建築に着手



牛乳パックで建築資材を作る特許を昨年取得し、タウンニュース等でもすでにひろく紹介されています「リサイクル広場まちだ」の名物おじさんこと小泉勝市さんが、1月19日(月曜日)朝のNHK「おはよう日本」の生放送にボランティアのお母さんたちとともに登場しました。「リサイクル広場まちだ」からの中継で番組に出演した小泉さんは、約4分にわたる放映のなかで、牛乳パックのリサイクルが進んでいない現状や2月にいよいよ「夢ハウス」を建てる計画についてレポーターに説明しました。

急転直下の取材、前日から入念なりハーサル

タウンニュースのこれまでの記事やインターネット上の情報から牛乳パックのリサイクル工法に注目したNHKのスタッフが小泉さんのもとに連絡を

いれたのは、放送当日のおよそ一週間前。わずかな期間のあいだに、あれよあれよという間に生放送で取り上げられることが決まり、放送の前日、18日(日曜日)の午後には、10人ほどの取材クルーが2台の車に分乗してリサイクル広場に到着し、取材のために特別に開けられた広場のなかで、照明機材の設営や撮影の段取りについて細かな打ち合わせがおこなわれました。

短い時間の枠に精一杯の思いをこめて

リサイクル広場だからこそ、自分はここで牛乳パックのことをやっているんだと、常々語る小泉さん。2006～2007年のごみゼロ市民会議でも「リサイクル広場とポイント制度の検討分科会」に所属し、リサイクル広場を全市的に拡大しなければ意味がないことを分科会メンバーに力説してきました。その思いも含め、牛乳パックのリサイクルをめぐる考えを紙にまとめて準備したものの、限られた放送時間の枠内ではほとんど取り上げられず、悔しい気持ちも残りました。それでも、放送をみた視聴者からの問い合わせが都内や栃木県などからさっそく入っているとのこと。また、『月刊廃棄物』といった専門誌や民放のラジオ局からも取材の申し込みが入るなど、その反響はとてもの大きなものになっています。当日の放送の様子はタウンニュースでもさっそく取り上げられました。

2月からいよいよ「夢ハウス」の建設に着手

放送のなかでも触れられたように、ボランティアの方々の協力も得ながら、これまでに準備された牛乳パックのブロックをもとに、いよいよ2月から「夢ハウス」のプロジェクトが動き始めます。リサイクル広場まちだ発の注目イベントが、今年また全国を驚かせそうです。



第66号目次

リサイクル広場の名物おじさんがNHKに生出演	1
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(一)	渋谷 謙三 2
屋根のない博物館「玉のよこやま」アート&ウォーク	向谷 有加 5
町田市中期経営計画 重点政策「商業・文化芸術都市の創造」を考える:9	大橋 成夫 6
事務局だより・編集後記	8

ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(一)

渋谷 謙三

■ プロローグ

『「ふるさとづくり」なんて言葉を臆面もなく使うのはおこがましいのではないか。ましてや「50年」もの半世紀の長い間の、古ボケた「幻燈器」を今さらカタカタ回わされても迷惑千万だろうに、、、』どこからともなく、そんな声が聞こえてくる。これまで、私が何かを始めようと思いついた時、必ず聞こえてくるあの例の声だ。

『謙三、ひるむんじゃないぞ。あんたが役人時代に無我夢中でやった20年間の仕事、それから後の30年余りの市民活動は、あんたが生まれ育ったふるさと町田のために役立っているものが結構ある。だから自信を持って若い人たちに参考資料のひとつとしてさらけ出せ』。この声は、これまでの私の半生を温かく支え、厳しく励ましてくれた「もうひとつの声」だ。数は少なくなったが、まだまだあることはある。

『マ、いいか。都合よく背中を押されたふりをして、古いものをひっぱり出して整理してみよう』と決めたのが、市制施行50周年事業真っ盛りの昨年暮れのこと。そしてその気持ちが、この連載レポートの開始につながるようになった。



ふるさと作りの原点？小山田緑地公園で妻と

私は、単なる回顧録や思い出話などを始める積もりは毛頭無い。しかし、時代を象徴するジェット旅客機や新幹線特急のように、いったん乗ってしまえば、立ち止まって辺りを見回すことも、ふと我れに帰ることすらままならない現代社会に組み込まれていると、私自身も、一度は思い切って過去の原点に立ち戻っ

てみることも必要なのではないか。それに私は、これまで余り考えもせず沢山の種を蒔き散らしてきたけれども、現在や未来に芽を出し花を咲かせてくれそうなものに限って、それが「ふるさと町田」の今後にどんな風に役立つのか、また、役立ててもらえそうなのかを考えて見ることも、あながち無駄なことではなかろうと思いついたのだ。

■ 私のルーツ

私は、1934年（昭和9年）8月1日に東京都南多摩郡忠生村大字木曾字滝の沢※1で生まれた。父は祐三、母はフジといい、二人が授かった子どもたちは全部で八人、私は七人目のシッポで三男、妹が一人いる。ただし、父は、後に生糸商としての初代祖父の名前を襲名したので、二代目「兼吉」の名で知っている人の方が多いと思う。

（※1：「滝の沢」という字名は、今はバス停の名前ぐらいしか残されていないが、幼い頃、谷底の「泉源さま」と呼んだ「冷たい湧き水」が必ず思い出される懐かしい地名だ）

父は、周辺農家の多くが副業で手がけていた養蚕の繭糸を買い集め、それを桐生、八王子方面の織物業者へ売り渡す生糸商で、通称「絹の道」の町田街道沿いの原町田や八王子市内に手広く店を構えるなど手腕家として知られていたが、ある時、突然に脳溢血で倒れ意識が回復しないまま 49 歳の若さでこの世を去った。太平洋戦争最中の昭和 18 年 10 月のことで、私は未だ小学校 3 年生だった。そのようなわけで、残念なことに私には父のことについて鮮明な記憶が余り無い。



自宅の玄関前で、父・兼吉

ただ、夏の暑い日に上半身裸になってあぐらを組み、母が丹精して作った大好物のスイカに旨そうにかぶりついていた姿だとか、父は大変に短気でせっかちな気性で、外出着の身支度をすっかり整えてから、草履が無いと言って足袋を履いたまま玄関の土間に降りて怒鳴っている姿など、いくつかの印象に残る姿しか覚えていない。

しかし、母は父の分まで生きるかのように 87 歳の天寿を全うした。父が健在だったときはもちろん、父を突然に失った後も、沢山の子どもたちと寝たきりの祖母の世話と家事一切を、長男守生の嫁志津子と二人でやりながら、時間を惜しんでは裏の畑で野菜作りに勤しむという、当時の「女性の鏡」を絵に描いたような、稀に見るよく出来た女性だったらしい。これは母から直接聞いた話だが、実家は今の神奈川県川崎市柿生の山口という農家だったが、私の祖父は母の評判をどこからか聞いて来て先方の親と交渉し、お見合いもせず結婚話しを決めてしまったのだという。母は仕方なく



自宅でくつろぐ、珍しい母の写真

決死の覚悟で嫁いで来てから初めて父に会い、「そこそこの男前だったので安心した」と笑いながら話した。母は普段は実に控えめで質素な生活を続けた人だったが、そんな母の気質をどうしてしっかり受け継げなかったのか、私は今になって悔やむことしきりである。

大黒柱を失ってからの渋谷家は、未だ大学を出たばかりの新婚ホヤホヤの 24 歳だった守生が家業を受け継ぎ、併せて 6 人の弟や妹たちの父親役も引き受ける羽目となった。

さて、このような渋谷家に生まれ育った私は、それ以前も以後もいろいろな事情があり、戦時中の小学校は原町田の町田国民学校、中学は八王子市立五中、高校は都立立川に八王子市内から通学、その後実家に戻り、大学は渋谷の国学院大学文学部に通った。

小学校 6 年生から中学生の時代、「6・3 制野球ばかりが上手くなり」の例に洩れず、私も軟式野球の虜に、高校では軟式テニスクラブに興じながら近所に住む他校の女子高生と懇ろに、国語教師を目指した大学では入学式当日に体育会蹴球部に本気で入部した。

中学からの学生時代を通して私が一貫して描いていた人生設計図は、沢山の子どもたちと一緒に運動場を走り回るような教師像だった。その理想モデルは、敗戦直後の町田一小6年生の時の担任教師だった若き日の飯田俊郎先生にあった。(当時の先生は20歳そこそこの社会科の全校生徒の憧れの熱血教師だったが、授業は自らが版刷りの歌詞を配り、オルガンを弾いて私たちに日本人の愛唱歌を教える優しい人だった。昨年88歳の米寿を迎えられたが、今でも町田地方史研究会などで、たまに、ふるさと町田の生立ち記を市民に熱弁を振るわれている)

■ 公僕-ふるさとづくりの始まり

私は、50年前の1958年(昭和33年)8月、誕生したばかりの町田市役所に就職した。町田市はその年の2月1日に東京都南多摩郡の4ヶ町村合併で生れたが、市制初の新規採用職員試験が6月に行われ、私は10名程の合格組の仲間にも首尾よく滑り込んだ。

当時は、多くの戦地からの帰還者の働き場がなく、救済策として小中学校の代用教員制度があり、東京都でも教員採用試験を手控えており、私の年来の願いであった教師への道は、しばらくは見送らざるを得なかった。

私は先ず市の教育委員会へ配属された。仮の宿とも考えて入った教委事務局の仕事は、図らずも私に「教師への願望」を次第に忘れさせ、その後の私のライフワークとなる「ふるさと町田づくり」の道へといざなう結果をもたらすこととなった。

さて、老人の昔話は、今回はこれ位で一休みして、新しい年の話題に触れておこう。

昨年末に、町田サッカー協会がJリーグ入りをめざして取り組んできた町田プロチーム『FC町田ゼルビア』が、関係者の長年の努力の甲斐あって、今年から日本フットボールクラブ(JFL)入りを実現した。ここで今季4位以内の成績を挙げれば、来季は念願のJ2昇格の夢が本物になる段階にまで漕ぎ着けた。しかも今年は、町田サッカー協会が創立40周年を迎える。石阪市長も関係者のこれまでの努力を多とし、Jリーグ昇格の第一条件である野津田のホームスタジアムに1万人以上の観覧席の整備と併せて夜間照明施設4基の整備に、8億円を投ずると約束した。まさに全市を挙げてこの快挙を達成させる体制が整いつつある感じだ。これぞ全市民で取り組める新しい「ふるさと町田づくり」のビッグプロジェクトだと私は思う。



初のサッカーチーム・トーターズ

私は、「ふるさとづくり50年」の歩き始めた頃に、仲間たちと結成した初の社会人のサッカーチームを契機にして、その翌年の1969年に町田サッカー協会を創立した。その協会が関係者たちの努力によって幾多の風雪に耐え、今日を迎えたことに心からの感謝と嬉しさの念を表したい。同時に、このプロジェクトを「ふるさと町田の内外に誇れる銘品のひとつ」に是非とも育てあげたいと思っている。そのために私は、17年前に創立したケーブル・テレビ局(現在、J-COM せたまちに吸収されている)に、全試合中継をぜひ実現してくれるよう要請しようと考えている。

(次号に続く)

屋根のない博物館「玉のよこやま」アート&ウォーク

向谷 有加

昨年 2008 年の 11 月 22 日から 24 日にかけて「玉のよこやまアート&ウォーク」というイベントが相原小山地区で催されました。高尾山口から町田市の堺地区にかけて「玉のよこやまウォーキングの道」開設の記念イベントであり、また市制 50 周年記念事業のひとつでもあります。

期間中、商店や邸宅、あるいは空き店舗のスペースを利用して芸術大学をはじめ 5 つの地元大学の学生がアトリエやギャラリーを開くアート系イベントなどとともに、文化財や植物から相原の歴史をひもとくフリーウォーク、リサイクル絵本の配布や少年少女発明クラブ展などを企画した「子ども博物館」



など、多彩な催しが堺地区全体で行われました。残念ながらすべてのイベントを廻ることはできませんでしたが、私がお手伝いした最終日の相原のようすを少しだけご紹介します。

この日の天候はあいにく小雨交じりの曇天。相原駅に降り立ったときは少しさびしい印象を受けましたが、駅からお手伝いに向かう清水寺までの道なりに商店や邸宅ガレージのなかで準備にいそしむ学生さんの姿が点々として、静かな朝の相原の道すがらにもすでに活気がありました。ギャラリーの間にはひねりのきいたカフェもいくつかあり、これもギャラリーとともに目をひきます。午後にこのカフェ周辺を外から覗いたと

きは満席に近い様子。このあたりは路地で開催の文化祭といったおもむきでした。

いっぽう清水寺では、フリーウォークコースのゴール地点として、お寺、地域の歴史についてガイドさんとともに相原にゆかりの深い青木家（幕末時代の名主の家柄であり、一族には種痘の普及に努めた蘭学医、青木得庵がいる）の方から説明をいただき、往時に思いをはせました。そののち境内で小日向庸三氏の手による生け花を鑑賞します。大胆に竹、ススキ等を配してダイナミックながらも庭園の情緒に溶け込んだ作品の前に、参加者の多くが小日向氏の説明に耳を傾けながら長いこと足をとめていました。最後はお堂の中でお茶会です。石黒絢実氏の日本画「鶴」を鑑賞しながらお茶とお茶菓をいただきます。お茶会にのみ参加するひともちらほらいて、あいにくの天候にもかかわらず、盛況のなか、フリーウォークと清水寺でのイベントに幕を閉じたそうです。

「屋根のない博物館」は時間もスペースもまるごと使ってアートを楽しもうという、ほんとうの意味でぜいたくなコンセプトのカルチャーイベントの試みだという印象を受けました。それだけに、もっと広く宣伝してくれていたらよかったのに、とその点を少々もったいなく感じました。

最後になりますが芸大の学生さんがクリエイターとして町田の相原の土地からそれぞれに発信するものを模索する、というコンセプトのギャラリーイベントは横浜のアートスペース ZAIM のプロジェクトにも通じるような催



しだと、以前に『まちづくりの環』で紹介された〔2008年7月号(59号)の大橋成夫会員の寄稿をぜひご参照ください…編集担当〕横浜市の事業について思い出したことにも触れておきたいと思います。

続：市民企画講座「アート之力、アートの可能性」

新年を迎え 20 日には、アメリカ合衆国の新大統領にバラク・オバマが、ワシントン国会議事堂で就任宣誓を行い、250 万人に及ぶ国民が「アメリカは生まれ変わる」熱い思いを持って集い祝った。オバマ大統領の演説「困難な時代に米国民一人ひとりが団結し、責任を共有し、希望を持って米国を再生させる『チェンジ(変革)』」に、米國中の国民が会場で、またテレビの前でうなずいたことだろう。金融危機のいま、アメリカ人は幸せだなと羨ましかった。

ひるがえって、日本では、政治は、首相は、と考えると希望や夢が持てない現状が情けない。この数年、日本も変わるかと期待したが中途半端な改革で、それもこの金融危機をいいことに政治は逆戻りしつつある。日本人は、本当に駄目になったのであろうか？ われわれも真剣に経済主体でなく文化芸術で“社会の変革”を考える時がきたようだ。

「まちづくりとアート」(第4回:2009年1月18日)

アートフロントギャラリーの薮田尚久氏は、最初に“パブリックアート”の解説から始められた。“パブリックアート”は、アメリカで生まれた。1930年代にルーズベルト大統領のニューディール政策で、社会のインフラストラクチャーの再建にアーティストの力を積極的に活用することを考え、1959年建築費の1%をアートにという「アートのための1%法」がフィラデルフィアで制定され、全米各州に広がった。

日本では、1970年代後半、仙台市や宇部市、広島市などが公園や街中に設置を始めた。その後流行現象になり、各地で同じ作家のものが見られるようになった。自治体側に作品の価値評価できる職員がいないので、安心できる既成の作家を求めた結果だった。さすがに最近では、自治体も“公共性あるアートとは？”と、場所性や文化性などを議論されてきている。

「ファーレ立川」や「幕張」など開発事業とパブリックアートの関係を、その理念や選択方法などが、映像を映写しながら詳しく解説された。商業施設「中目黒GT」、「北海道・北広島市西部小学校」、マンション「横浜ポートサイドプレス」など、アートの特殊な活用事例も紹介された。ファーレ立川では、広場のモニュメントではなく、“歩道空間のアート化”を目指して、36カ国109点のアートが、歩道やビルの間、壁面などが展開されている。市民が、気軽に触れたり探す楽しさが評判になり、いまでは、自発的な市民のガイドボランティアによる“アート探訪ツアー”が行われている。

“コミュニティ活動を支援するアート”として、2年に一度開催の商店会・町内会などの共催で、公募作品を街中に展示する「代官山インスタレーション」展。毎年、新潟県上越市(旧高田)の昔からの碁番目の商店街を、地域の人たちの入選作品のフラワーで飾る「城下町高田・花ロード」などの、ユニークな“アートのまちづくり”が、映像で紹介された。

最後に、2000年から始まった“越後妻有大地の芸術祭 アートトリナーレ”に(詳細は、本誌62号をご参照ください)。2000年に新潟県が、“市町村合併促進と限界集落の活性化”を目的に、10年計画として始まった事業であったが、地域の人たちの要望があり引き続き開催することが決まった。

第4回目の本年は、7月26日から9月13日までの48日間、十日町市を中心に開催される。地域の主体形成・大地の芸術祭の自立に向けて「特定非営利活動法人越後妻有協働機構」が昨年7月に、“地域の自立に向けて、空家、廃校利用、耕作放棄地の活用、雇用の拡大など、地域の根底にひそむさまざまな課題にチャレンジし、解決策を提案”するとして設立された。代表に福武總一郎(ベネッセ会長)が就いた。次回からは、このNPOが主体になって開催されることになった。

まさしく“アート”が地域の活性化＝まちづくりに役立ったのである。



第1回「ヒーリングアートとは？」：
病院の小児科病棟の壁面アート



第4回「まちづくりとアート」：
Power Point を使いながらの講義風景

「アートは必要か？ 日常にとって」(第5回:1月25日)

受講者のみの参加で“まとめ”を行った。参加者は10名で少々寂しい会合であったが、自己紹介とこの講座の感想を聞くことにした。始まると皆さんの熱意ある話しに時間を忘れ、今回の講座で一番長い日になった。皆さんの主だったものをアトランダムに記す。

- ・リタイア後“アート”のある生活をして、日常生活に心温まる気持が生まれた。
- ・この機会に、“アート”の仲間の輪を少しずつ広げたい。
- ・いろいろなアート関係の方々の話が聞けてよかった。
- ・“アート作品”は、展覧会場だけでなく、日常生活の中であってこそ“アート”と思い、住まいを利用して活動をしている。
- ・普通の老人が“アート”に触れる“場”を、身近な場所につくっていききたい。
- ・公民館事業としては珍しい“アート”講座だが、参加者が少ないのは残念。
- ・この“アート”講座の続編をぜひ計画して欲しい。
- ・公民館の“演劇”活動に関わっている。仲間とコラボして楽しい。
- ・“アート”を見る人の五感を大切にしていきたい。
- ・“アート”は、生きる力を引き出す力がある。
- ・“アート”で、自分の中の何かが変わると感じられる。“アート”を深めたい。
- ・何が“アート”なのか分からなかったが、“アート”が身近になった。
- ・子どもや高齢者にカラーワークショップを行っている。今回の知識を役立てたい。
- ・認知症セラピーとして、アートが患者に効果があることを実感している。
- ・アートの新しい分野を知ったことは、大変ありがたい。
- ・ここで学んだことが、町田市内で実践できることを望みます。
- ・公民館事業の“障害者専門学級”活動をしていて、予算がなくていい作品にいい材料を使用できないのが制作者に申し訳がない。
- ・身近に“アート”環境がないため、子育て中や家事があると絶縁状態になる。
他にも多くの貴重な意見があったことを付け加えておく。

地元で“アート”を活用して、実際に活動しておられる方々と交流できたことは、大変有意義でした。少しずつ仲間を増やして、ゆるやかなネットワークをとおして、町田市のアート環境創出に役立てたいものです。

参考：

- ・財団法人たんぼぼの家理事長：播磨靖夫(奈良市六条西 3025-4)
- ・特定非営利活動法人芸術家と子どもたち代表：堤康彦(東京都豊島区西巢鴨 4-9-1)
- ・女子美術大学メディアアート学科教授：山野雅之(相模原市麻溝台 1900)
- ・株式会社アートフロントギャラリー：藪田尚久(東京都渋谷区代官山猿楽町 29-18)

筆者連絡先：大橋成夫(町田市玉川学園 5-28-23 メール：o-bridge@air.linkclub.or.jp)

事務局だより

定例会のおしらせ

・3月の定例会は3月4日(水曜日)です。

中央公民館 学習室(3) 18:00～

2008年度総会のご案内

今年度の総会は3月14日(土曜日)を予定しています。総会とあわせておこなわれる記念イベントの企画は2月4日(水曜日)の定例会にて話し合う予定です。日時が迫っていますが、どうか多くの会員のみなさまが今月の定例会に参加くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

玉のよこやまシンポジウムが開催されます

今号掲載の向谷会員の寄稿でご紹介しました「屋根のない博物館・玉のよこやまアート&ウォーク」。アートをつうじた町田のまちづくりのこの試みを今後につなげていくためのシンポジウムが2月22日(日曜日)の午後、桜美林大学淵野辺キャンパスでおこなわれます。このシンポでは、ふたつおこなわれる記念講演のひとつに、当市民会議の事務局長である渋谷謙三氏が登壇いたします。大橋会員の今号の寄稿でも触れられていますパブリックアートの可能性を町田の地元から考えるチャンスであるとともに、町田のまちづくりの原点である「考えながら歩くまちづくり」を見直す機会でもあります。ぜひともご参加ください。

記

日時：2月22日(日)午後1時～4時30分

場所：桜美林大学淵野辺キャンパス「プルヌスホール」(JR 淵野辺駅北口からすぐ)

定員：120人(お申し込み順)

お申し込み方法は、2月2日の正午からお電話で町田市コールセンター(042-724-5656)へどうぞ。なお、この催しにかんするお問い合わせは、町田市博物館(042-726-1531)まで。

編集後記

今号も会員のみなさまのお力添えにより、内容もりたくさんでお届けすることができました。本当にありがとうございます。事務局長の新連載「ふるさとづくり50年・私の幻燈譜」。これからますます町田の知られざる歴史が紐解かれていきます。どうぞ続きをご期待ください。今号一面でご紹介しました小泉さんの「夢ハウス」プロジェクトも注目です。リサイクル広場まちだに足を運んでぜひぜひごみゼロ(ゼロ・ウェイスト)に向けた試みを生でご覧ください。



そのゼロ・ウェイストに向けた取り組みとこのことでは、昨年は市民の側からの熱心な働きかけや多くの自主的な活動の絶えざる継続にもかかわらず、全市的な計画の策定という点では停滞の一年だったという声が強く聞かれます。このままではごみゼロ市民会議で盛り上がった市民の熱い思いが冷めきり、町田のごみ行政に大きな禍根を残すことにもなりかねません。市民ひとりひとりが希望をもてるまちとしてのリーダーシップを今年こそ市には期待したいです。



2月14日(土)、市民ホールで開催される「町田の底力」もぜひご参加を(H.I.)。

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報

2009年2月2日第66号発行

発行者 佐藤東洋士

編集責任者 井上弘貴

事務局 常盤町桜美林大学内

TEL 042-797-6947